

# 説 林

## Ratnavadānamālā に つ いて

— Ratnamālavādāna, ed. K. Takahata, Tokyo 1954. 岩本裕 —

岩 本 裕

佛教説話文學の一つの類型として、しかもインド佛教が小乗から大乘に推移していつた長い時期を通じて佛教教團の内部に培われたアヴァターナ文學に關しては、數多くのテキストが傳えられ知られているにもかかわらず、未だ総合的な文獻學的記述はもちろんのこと、思想的<sup>(1)</sup>研究もなされていないのが現状である。前世紀の後半から今世紀の初めにかけて、アヴァターナの重要なテキスト(Diṅyāvādāna, Avadānaśāstaka, Avadānakalpalatā など)とそれらの翻譯が出版されるとともに<sup>(2)</sup> L. Feer, S. Lévi, J. S. Speyer などによつて注目すべき研究が數多く發表された。そして、これらがインド佛教史の研究に眞に重要な寄與をしたことはいまさら<sup>(3)</sup>に贅言を要しないであろう。その後、アヴァターナに關する研究は若干行われたが、最近二十年間の勞作としては、わずかに W. Zinkgräf と Kenneth K. S. Ch'en の研究が擧げられるに過ぎない<sup>(4)</sup>。しか<sup>(5)</sup>か、Asokāvadānamālā (Bendall's Catalogue, Add. 1492, 313 leaves), Avadānasārasamuccaya (ibid. Add. 1598, 171 leaves), Kalpadrumāvadānamālā (Cabatan's Cat. No. 26~27, 592 pages), Vratāvadāna-

mañā (ibid. No. 115, 146 pages) のとき大冊の重要なテキストが未刊のままに放置されているのであり、また單行の  
アヴァターナもわが常磐井堯猷博士が研究されテキストを公刊された *Sumāgadhavadāna* <sup>(6)</sup> を除く、*Mañūdavadāna*,  
*Sugatavadāna*, *Kapiṣavadāna* など數多くのテキストが未刊未研究のままに研究者の出現を待つてゐるのである。これ  
らのアヴァターナ集に集録されて傳えられる個々のアヴァターナなり單行のアヴァターナを、その説話ないしはモチーフ  
の類別に従つて比較研究し、説話なりあるいはそのモチーフの展開の跡を辿ることは、インド精神文化の華といわれる説  
話文學の歴史に重要な一頁を書き加えることであり、またアヴァターナ集に於ける説話と本緣部などに屬する各種の經典(例  
えば『雜寶藏經』など)所載の説話を比較對照し、その收載の系統を尋ねることは、佛教經典の發達史に大きな寄與を提  
供することになる。また、説話の發展段階を辿り、その背後にひそむ思想の變遷の跡を明かにすることは、インド佛教史に  
一道の光明を投ずる所以と考えられる。一例を擧げてみれば、*Sumāgadhavadāna* に見られるクリキン王の十夢を『阿難  
七夢經』や『波斯匿王十夢經』という一聯の夢經と稱すべき經典の記述と比較研究することはインド夢占文學の展開を跡づ  
けることであり、また例えば小乘に屬する *Avadānasātaka* に於ける *Rāṣṭrapālavadāna* (ix. 10) と *Aśokavadāna*-  
*māñā* に於ける *Rāṣṭrapālavadāna* (No. 21) とを比較し對照して、そのモチーフの取扱ひまたは用語に思想史的變遷の  
跡が辿られるときにはインド佛教史に興味ある一齣を書き加えることになるからである。さらに、*Aśokavadānamāñā* 所  
收の *Bhavalubdhakavadāna* (No. 12) と *Avadānasārasamuccaya* 所收の同名のアヴァターナ (No. 4) とは同一の  
ものであるが、所傳を異にするこの同一のアヴァターナの公刊は *abhidharma* の研究資料に貴重な一篇を加えることにな  
らう。このように、アヴァターナ文學の研究はインド佛教學のみならず弘くインド學の重要な局面であるに拘わらず、いま  
だにほとんど未開拓のままに放置されている事實は、斯學のために一大痛恨事といわねばならないであらう。このような情

況にあるとき、わが高島寛我先生が *Ratnamālāvadāna* と稱するアヴァターナ集のテキストを公刊されたことは、わがインド學界の歴史に偉大な貢獻をされたものであり、學界のために誠に慶賀すべきことといわねばならぬ。高島先生校訂のテキストは

*Ratnamālāvadāna, a garland of precious gems or a collection of edifying tales, told in a metrical form, belonging to the Mahāyāna, Tokyo 1954. (Toyo Bunko, Oriental Library Series D. Vol. 3) 17×25 cm, XXV+481+38pp. 1 photo.*

で、先生三十年の苦辛の結晶である。既に約二十年前に（昭和十三年）テキストの前半（第十二アヴァターナまで）が出版され、われわれはその一端に接して後半の公表されることを待望していたのであるが、いま茲に全容が完全に發表されて、われわれは漸く渴望をいやすことができた。全篇三十八のアヴァターナを含み、その中三十一篇が *Avadānasataka* 所収の説話の *metrical paraphrase* であり、従つてまた漢譯佛典の『撰集百緣經』あるいは『雜寶藏經』に見られる説話とパラレルなものが多く、アヴァターナ研究に重要な資料が加えられるに至つた。しかも、Introduction (iii~xxv) 以下、このテキストの刊に依據した寫本に關する記述があり (iii~ix)、『*avadāna*』S. 2. *Buddhistic thought in the Ratnamālāvadāna* (x~xviii), S. 3. *Philological Remarks* (xviii~xix), S. 4. *Avadāna and itivuttaka* (xx~xxv) の項目に關して、先生の永年の研究の一端が洩れられた。『*avadāna*』卷末には、*Bibliography of Avadāna Literature and Reference Books* (p. 1~3) なる Index of Words (p. 7~38) が載せられ、研究者の便宜に供された。特に、*Sanskrit, Chinese and Tibetan parallels of tales in Divyāvadāna* (p. 4~6) は今後 *Divyāvadāna* を研究する者にとつて、極めて貴重であらう。

しかし、このように懇切で貴重な序論と附録をもつ公刊であり、またテキストそのものも極めて興味深いものがあるにも拘わらず、なおこのテキスト公刊を繙くとき若干の疑問を持たざるをえない。以下、その一二を記して、高教を仰ぎたい。

まず第一に、このテキストの題名とその寫本に關しての問題である。このテキスト公刊の所依の寫本は Ratnavadānamālāと題する寫本Aが第十二の Sārthavahāvadāna までの底本となり、第十三の Vadikāvadāna 以下末尾までは Ratnavadānatatva と題する寫本Aが底本となつてゐる。それだ、二十三篇のアウマターナを含む Ratnamālāvadāna (sic)と題する寫本Bの第十二まで(寫本Aの第十二までと合致する)と第十九の Vadikāvadāna (これは寫本Aの第一に該當する)とが對校されてゐる。(なお、この外に、寫本Pとして Bibliothèque nationale 所藏本が第九の Suktavādāna まで對校されてゐるが、この寫本については後で觸れることとする。第一の Kausīdyaviryotsāhanāvādāna のみに用いたCおよびDはいま問題外であるので省く)。そして、寫本Bの第二十 Gandharvikāvādāna は寫本Aの第二と同名であるが、對校されていない。従つて、寫本Bの第十三から第十八までと第二十一から第二十三までの合計九篇のテキストは本公刊には見られないのである。いま、その關係を圖示すると、

本 公 刊	A	B	A'
I-XII	I-XII	I-XII	
XIII-XIV		XIII-XVIII XIX-(XX) XXI-XXIII	I-II
XV-XXXVIII			III-XXXVI



- V ABP iti śālapuṣpāvadānaḥ.....
- VI ABP iti ratnāvadānamālāyāḥ sūkarayyavadānaḥ.....
- VII A iti ratnāvadānamālāyāḥ vapuṣmatāvadānaḥ.....
- B iti ratnamālāvapuṣmāna(*śic*) kumāro nāma.....
- P iti vapuṣmatkumārāvadānaḥ.....
- VIII A iti ratnāvadānamālāyāḥ praśnottarāvadānaḥ.....
- B iti śrīratnamālāvadāne devaputrpraśnottarā.....
- P iti devatāpariṣcchāsūtraḥ.....
- IX A iti ratnamālāyāḥ śuklāvadānaḥ.....
- B iti śrīratnamālāvadāne.....
- P iti śuklāvadānaḥ.....
- X AB iti śrīratnamālāyāḥ hiraṇyapaṇyavadānaḥ.....
- XI AB iti śrīratnamālāyāḥ hastakāvadānaḥ.....
- XII A iti ratnamālāyāḥ sā[r]thapatyavadānaḥ.....
- B iti śrīratnamālāvadānakathāyāḥ sārthavāho.....
- XIII A' iti śrīratnāvadānatatve vaḍikāvadānaḥ.....
- B iti śrīratnamālāvadāne kathāyāḥ vaḍikā-

これを表示すると、次のようになる。

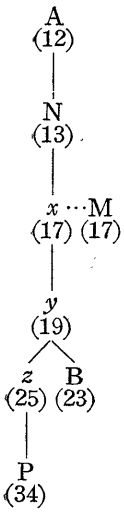
	ratnāvadanamālā	ratnamālā	ratnamālāvadāna	題名のみ
A	6	5	0	1
B	4	3	5	1
P	4	0	0	5

この表によつて見れば、*ratnamālāvadāna* という形は B のみに見られ、A および P には見えない。そして、*ratnāvadanamālā* という形は A、B および P に見え、*ratnamālā* という形は A、B に見え、P には見えない。この點に注意すると、*ratnamālā* という形は *ratnāvadanamālā* の省略とあつて、*ratnamālāvadāna* の省略ではないと考えられる。この點、寫本 P のコロフォンに *ratnamālā, ratnamālāvadāna* の見えないことの示唆するところは大きい。 *Ratnamālāvadāna* という名稱が寫本 B の全體のコロフォンとして明記されているのかも知れないが、たゞ明記されているとしても、それは寫本 B のみの特殊事情であると考へねばならないであろう。こうして、*Ratnamālāvadāna* という名稱はこのアヴァダーナ集の名稱としては不適當であり、このアヴァダーナ集はケンブリッジ本、Bibliothèque nationale 本 (P) および寫本 A に従つて *Ratnāvadanamālā* と稱すべきである。

しからは、*Ratnāvadanamālā* とはどのような内容を持つものであろうか。この問題は必然的に本公刊の内容とも關聯がある。いま、既知の諸寫本の内容を比較對照して検討してみることにしよう。ただし、ケンブリッジ所藏本 Add. 1615 は二十八篇のアヴァダーナを含み注目されるのであるが、内容に脱落があり不完全本であることが明らかであるから、<sup>(11)</sup> 茲では問題にしないことにする。

P	B	M (Cambridge) (Add. 1592)	N (Cambridge) (Add. 1628)	A
I—XII XIII Prasānta-karaṇa XIV Daśasivas XV Pretika XVI Kanṅkavarṇa XVII Vastrapradāna XVIII Balavatkumāra XIX Soma XX Tripita XXI Lekuṅcika XXII Paṅḍita XXIII Hastaka XXIV Sārthavāhasiddhakumāra XXV Nanda	I—XII XIII Prasāntakarūṇa XIV Daśaśila XV Pretika XVI Kanaka XVII Vastra XVIII Balavatkumāra XIX Vāḍika XX Gāndharvika XXI Pañcavarśika XXII Nirmala XXIII Nanda	I—XII XIII Prasāntikarūṇa XIV = P XVII Pretika XV Kanakavarṇa	I—XII = P	I—XII

寫本 P は三十四篇のアヴァターナを含み、七三六頁に及ぶ大冊であるが、第二十六以下は他の寫本と關係がないので、ここではその題名を省略した。<sup>(12)</sup> さて、この表を見て、Ratnavadanamāla に於けるアヴァターナの数の増減は次のようになるとめられるであろう。(括弧内の数字はアヴァターナの数を示す)





いま少しく説明を加えると、 $\alpha$ の段階に於いては、N(13)にPおよびBの第十四から第十六までの三篇とNandaの一篇が附加されている。M(17)はその順序に混乱があるので、 $\alpha$ の異本と見るべきであらう。ついで、 $\alpha$ (17)に、PおよびBの第十七と第十八の二篇のヴァターナが加えられて $\gamma$ (19)が成立し、B(23)は $\gamma$ (19)にVadika以下の四篇が加えられたものである。これとは別に、 $\gamma$ (19)にSoma以下Sarthavāhasiddhakumāraに至る六篇が加えられて $\delta$ (25)が成立し、さらに爾餘の九篇が加えられてP(34)が成立したと考えられる。こうして、Ratnāvadanamālāは寫本Aに示される十二篇が恐らく原形であると思われる。<sup>(18)</sup>高島寛我先生の公刊本はこの原形にRatnāvadanatavaと稱する寫本A'を續けたものである。このRatnāvadanatavaは前述のように寫本Bの追加部分のニヴァターナを冒頭に置くものであつて、直接寫本Aに續くものではない。しかし、寫本A'の第五(本公刊の第十七)のKacāṅgalāvadānaのコロフオンにiti ratnamālayāni avadānatave  $\alpha$   $\alpha$   $\alpha$   $\alpha$   $\alpha$  Ratnāvadanatava  $\alpha$   $\alpha$   $\alpha$  Ratnāvadanamālā(高島先生のいうRatnamālavadāna)に包攝されるとし、兩者を單一の書名の下に統一し、従つてヴァターナの篇數を順次に訂正したものと推察される。高島先生のこの推定は正しいかも知れない。しかし、前述の一點のみではいささか根據が弱いのではあるまいか。もとより、竹に木をついだことにはならないが、少くともメロンの蔓に胡瓜の蔓をついだようなことになりはしないだろうかと思われ。他の寫本の出現を期待してやまない。

高島先生の校訂本を見ると、校訂の態度にも若干の疑問がある。この點については、ただ一點のみを指摘するにとどめたい。それは第八のヴァターナのコロフオンの採り上げ方である。本公刊はこの部分に於いて寫本Aを底本とし、その葉數も本文中に記されている。それにも拘わらず、本文のコロフオンは寫本Pのを採用したと考えられ、寫本AおよびBの記載は異讀として脚註に記されている。しかも、目次には寫本Aの讀み方を採つてPrasottarāvadānaと記されている(寫

本Mすなわちナンブリッジ本 Add. 1592, *prasnottarā avadānaḥ*……(参照)。この點、不可解である。本文中に於ける異讀の採り上げ方などに關する疑問は、本題から離れることが遠いので、茲では問題にしないことにする。

こうして、高島先生の校訂本には、卑見によれば若干の疑念があるが、なおインド學に於ける貴重な資料であることは疑うべくもない。寫本Aの全容が知られたのみでなく、*Ratnāvadanatāṭya* (恐らく *tāṭya* であらう) という新らしいテキストが學界に紹介されたのである。仄聞するに、高島先生は校訂本に關してならに詳細な研究を發表される意向を持たれるとのこと、われわれはその日の一日も早からんことを待望せずにはいられなう。(一九五七・一・一〇)

註

(1) 極めて簡單な記述は WINTERNITZ, M.: *A History of Indian Literature*, Vol. II, Calcutta 1933, pp. 277~294.

と題される。

(2) 生類はフスマエーナの出版と翻譯。

① *The Jātaka-mālā* or *Bodhisattvāvadānamālā* by Ārya-gūṭa, ed by H. KERN, Cambridge (Mass.) 1891 (HOS Vol. I).

*The Gāṭakanāṭā*, tr. by J. S. SPEYER, London 1895 (SBB Vol. I).

② *The Divyāvadāna*, a collection of early Buddhist legends, ed, by E. B. COWELL and R. A. NEU, Cambridge 1886.

柳亮三郎『チキキブダーナの研究(附)翻譯』「大條學報」一三四—一三六(一四〇—一六二號(卷八)の *Supriyāvadāna*

の半部を)

③ *Avadāna-śataka*, a century of edifying tales, belonging to the *Hinayāna*, ed, by J. S. SPEYER, St. Petersburg, 1902—1909 (Bibliotheca Buddhica III).  
*Avadāna Śataka*, tr. par L. FEER, Paris 1891. (*Annals du Musée Guimet*, tome 18).

④ *Avadāna Kalpalatā*, a collection of legendary stories about the *Bodhisattvas* by Kshemendra, ed. with Tibetan version by R. SARAT CHANDRA DAS and SATTI CHANDRA VIDYĀBHUṢAṆA, Calcutta 1888—1911 (Bibl. Indica).

以下のテキスト及び翻譯の序文はフスマエーナ博士と著者の重要なる。

(3) 特に重要なものとして  
FEER, L.: *Les Avadānas Jātakas*, JA. 1884, p. 333 ff



(12) 第二十六以下のフヴァダーナの名稱は次の通りである。

- XXVII Dhārāmukha-Vajrapāni-Gopāla-Kaluddhaka-damaṇa.  
 XXVII Śūpa.  
 XXVIII Nāgākumāra.  
 XXIX Kārśaka-Svasitka-brāhmaṇa.  
 XXX Yāśorājā.  
 XXXI Mahākāśyapa.  
 XXXII Vidūra.  
 XXXIII Kaiṇeyaka.  
 XXXIV Sucandra.

(13) BendaI はインブリッジ本Mの内容を前掲の Feer の記す寫本Aの内容と對照したのべ、Mを Part of the Ratnāvādāna-mālā (17 tales) と記しつゝ B (Bendall's Catalogue, p. 131). 邦文に關しは Ratnāvādānamālā (first 13 tale) と記し、ロマンを添へていふ。

(東京理科大学助教授)

〔追記〕 本稿執筆後、東京大學圖書館所藏の梵本の目錄を披見する機會をえた、それによると、東大本には Avadānaratnamālā の名のものと、Ratnamālāvādānakathā の名のものの二種が見られる。上記の寫本Bは、所收の第十二および第十三のフヴァダーナのコロフォンから推察して、後者の系列に屬するも

のと考えられる。恐らく、最初十二篇のフヴァダーナを含む Ratnāvādānamālā が成立し、その後にいくつかのフヴァダーナが追加されて Ratnamālāvādānakathā と稱するに至つたものであるか。なお、東大本を詳しく検討する機會をえたい。少くとも avadānakathā の名をもつものが後代の發達であることは疑いを容れないと思われる。

(一九五七・四・九)